

高校教育改革と教師の多忙

大阪府立高校の多様化と「やりがいある多忙」

布川 淑(立命館大学大学院)

1. 多忙研究の課題

基準勤務時間外の持ち帰りを含んだ超過勤務が、学校教師の職務上の常態になっている¹。教師の多忙問題を勤務時間から把握した場合、日本の学校教師が勤務日に 11 時間程度の労働をこなしている状況に戦後変化はみられない。したがって、多忙研究では、多忙を量的問題として検討することの限界が指摘されてきた²。

多忙の量的側面よりはむしろ質的側面の検討が多忙研究の主要な課題になるなかで、多忙と多忙感が区別され、多忙感の発生要因に焦点をおいた考察が行われるようになっていく³。多忙感は、日本の教師の約 9 割が戦後一貫して表明してきた問題である⁴。なかでも 90 年代になってからは、精神性疾患の増加やバーンアウトなどのストレス現象として教師のメンタルヘルスが問題になっている⁵。それを背景に、多忙の質的把握を目的とする研究では、教師の職務実感や役割意識、教育活動の遂行を支える教師文化の内容が検討されるとともに、職業意識・文化との関係から教育活動の実態を解明することに焦点が当てられている。

しかし、教師にたいするアンケート調査の結果をみると、教育改革にたいする不満や、教育改革の進展にともなう多忙感が存在することがわかる⁶。したがって、教育活動の課題を考察する場合、教育改革と多忙との関係を実証する視角が求められている。

本報告は、教育改革と教師の多忙との関係を考察することを目的に、教育政策が立案・実施されるなかで多忙がどのように発生し、多忙感をもつ教師が如何なる教育上の課題に直面しているのか、大阪府を事例に検討したい。

2. 高校教育改革における多様化をめぐる論点

1948 年に全日制・定時制・通信制の課程として発足した新制高校は、普通科と職業科、実業高校として旧制の複線型を基盤に受け継いだ。1955 年の学習指導要領改訂によって類型制が導入され、普通課程における進学課程と職業課程が分化する。その後の高校教育の実態については、進学機会の拡大にともなって高校間の序列化が生じたこと、単線型高校制度の内実において格差構造が形成されたことが批判された。

例えば麻生や秦は、1960 年代から 70 年代における高校の量的拡大にたいして、高校が階層構造を形成し社会的選抜機能を果たしていると指摘した⁷。その上で、生徒の学校生活の質的格差を拡大させないために、多様な特性・属性をもつ生徒にどのようなレベルと質の教育を受けさせるのかと問題提起し、教育課程の多様化を政策提言した。しかし 1980 年代に入り教育課程の多様化が政策的に推進されると、竹内によって、高校教育が実質的に複線化したと指摘されるとともに、そうした事態にたいして多様化・個性化の高校教育にとっての意味を「分化と統合」の課題として問う視角が提示された⁸。

高校教育にたいする社会的要請と教育政策の規定的側面に着目した場合、高校は社会の選抜装置として機能し、学校教師が社会的格差の再生産に寄与していると捉えられる面がある⁹。しかし、学校教育の相対的自立性に着目した場合、学校現場が教育改革を自らの教育課題との関係からとらえ返す側面があるのではないだろうか。

例えば久富は、90 年代のバーンアウト発生の増減の背景について、教育改革にたいする教師の受動的ないし能動的関係性の変容を推察している¹⁰。そうした指摘をふまえると、高校多様化が学校の特色づくりとして推進されるようになった改革の現状と教師の多忙との関係をどのように評価するのかという課題が導き出されてくる。

3. 府立高校改革の進展

大阪府では、学校の特色づくりとして高校の多様化と統廃合を一体的に推進する「再編整備 10 ヵ年計画」(1999 開始年度)が実施されている。特色づくりが本格化するに至った経緯はどのようなものか。

1980 年代前半にはじまる府立高校の再編整備計画は、課程別に推進された。すなわち、80 年代の府立高校改革の焦点は、定時制・通信制、職業課程の改編におかれていた一方で、全日制普通科の改革は、学習指導要領改訂にもとづいて必修科目を削減し、選択履修の教科と科目数を増加させることによって教育課程編成を多様化するものであった。

このように、80 年代には課程別に取り組まれていた全日制の改革が、90 年代に入り変容する。1991 年に、中央教育審議会が新しい時代の人材育成を

課題に据えて、普通科と職業学科を総合した新学科の設置を答申し、その後、総合学科や単位制高校、中等教育学校が制度化されると、府立の全日制における新学科・コースの設置が特色化の内容に位置づけられるようになる。こうして課程の区別をこえた多様化が推進された結果、1996年までに普通科132校のうち27校で特色あるコースが設置され、15校で専門学科が併置された。職業学科21校のうち13校が新学科に改編、3校の総合学科が設置された。

さらに大阪府では、1989年にピークを向かえた在籍者数が翌年減少に転じたのにともなって、入試倍率・入学者数の低下した高校の廃校が検討されるようになる。それまでの再編整備計画の策定において、府立高校の教育課程改編と統廃合とは別個の課題として議論されていた。しかし、特色化と統廃合を組み合わせた再編整備が検討されるようになる。すなわち、1999年以降の再編整備10ヵ年計画では、高校設置数の32校減を数値目標に据え、高校の種別化・特色化を促進することが目指されている。

90年代後半以降の改革は、一面では文部科学省が推進する高校複線化に対応する目的で「未来からの改革」と位置づけられている。しかし他面では、高校増設による量的拡大期以降に明瞭となった高校の序列化と進学者の輪切りへの対処として、「入れる学校」から「入りたい学校」への転換を目指すものである。すなわち、新しいタイプの学校へと学科・教育課程を改編することが、従来の高校整備が生じさせた問題への対策として位置づけられた面がある。

というのも、高校増設期に学区内の学校数が増加した大学区制のもと、中学校段階の成績によって進学者が振り分けられ、大学進学実績も高校ごとに異なっている。つまり、偏差値による輪切りが明瞭な点が府立高校の特徴になっている。輪切りは、学校内部の生徒層やカリキュラムの学校間差異を生じさせるだけでなく、不本意入学や中途退学の発生率を全国一高いものにさせている。

こうした実態を背景に、90年代半ばまでの多様化の進展にたいして、子どもの個性や能力発達に特色化が役立つのか高校教育のあり方を検討する必要が提起された。しかし、そのような論点が退けられるなかで99年以降の再編整備計画が策定された。

4. 学校の特色づくりと教師の多忙

府立高校の特色化は、①新タイプの高校への改編や新タイプの学科の設置、②学校独自教科・科目の設置や教科外活動における特色ある取り組みによる特色ある教育課程の編成、③府教委や文科省、内閣府の学校指定研究や委嘱・委託事業へ取り組むといった形態がある。こうした改革指標になりやすい特色化に取り組まない場合も、すべての高校が何

らかの特色をつくることが求められている。

さらに、特色化の進捗状況から分類すると、①98年以前に学科改編や新学科・コース設置により特色化した改革校、②99年以降に学科改編や新学科・コース設置により特色化した改革校、③学科・課程改編せずに重点研究を活用することで教科指導内容を変更する高校、④特色化の施策を適用せずに教科指導・生活指導を模索する高校に大別される。

こうした特色づくりが学校現場で取り組まれるための改革条件は、教育課程編成を見直し、学科改編や新たなコース・科目設置に必要な校務分掌組織を見直すことにある。つまり、学校改革関連の校務分掌と、教科・科目の増加や多様化に対応するための教材研究や授業準備が忙しくなる。

再編整備の中盤の時期にあたる2003年に教師から聞き取りを行った結果、教材研究・授業準備、校務分掌を中心に多忙が発生している¹⁾。さらに、多忙感は教育活動にたいする自信や達成感、やりがいと並存している。すべての高校で特色づくりに取り組むことが教師に期待されるなかで、生徒実態をふまえた教育活動をつくっているという実感が教師の多忙を支えてきた。再編整備計画は2008年に最終年度をむかえる。学校の個別性に対応した高校教育が実現したのかどうか総括が求められる。

1 東京大学『教員勤務実態調査(小・中学校)報告書』(2007)、Benesse 教育研究開発センター『教員勤務実態調査(高等学校)報告書』(2007)

2 油布佐和子「教師の多忙化に関する一考察」『福岡教育大学紀要』(1995)、藤田英典・他「教師の仕事と教師文化に関するエスノグラフィー的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』(1995)

3 酒井朗「多忙問題をめぐる教師文化の今日的様相」志水宏吉編著『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院(1998)、久富善之編『教員文化の社会学的研究』多賀出版(1988)、稲垣忠彦・久富編『日本の教師文化』東京大学出版会(1994年)

4 長谷川裕「教師たちの多忙とバーンアウト」久富編『日本の教員文化』多賀出版(1994)

5 大阪教育文化センター『教師の多忙感とバーンアウト』京都・法政出版(1996)、文部科学省「教育職員に係る懲戒処分等の状況について」(2006)

6 国立教育政策研究所「小学校における学級の機能変容と再生産過程に関する総合的研究」(2002)、同「ホリスティックな教育改革の実践と構造に関する総合的研究」(2003)

7 麻生誠「教育における選抜と差別」藤永保・麻生編著『能力・適性・選抜と教育』第一法規(1975)、同「学校アノミー病」同編『学校ざらい 勉強ざらい』福村出版(1983)、秦政春「高等学校格差と教育機会の構造」『教育社会学研究』(1977)、同「高校教育の大衆化と教育機会の構造」『福岡教育大学紀要』(1978)、同「教育機会の格差」『学校ざらい 勉強ざらい』

8 竹内常一『日本の学校のゆくえ』太田次郎社(1993)、同・他『青年期をひらく制度改革』労働旬報社(1995)、同・高生研編『揺らぐ(学校から仕事へ)』青木書店(2002)

9 P. ブルデュー(宮島喬訳)『再生産』藤原書店(1991)

10 久富善之「日本の教師」『社会学研究』(2003)

11 拙稿「教師の多忙と多忙感」『立命館産業社会論集』(2006)